

地域ケア個別会議において
お伝えしたいこと

北海道薬剤師会
西部 浩

薬局薬剤師の地域連携

想定される連携先

介護支援専門員、訪問介護員等

医師・歯科医師・病院等の薬剤師、看護師（訪問看護師）、理学療法士、言語聴覚士、歯科衛生士、管理栄養士等

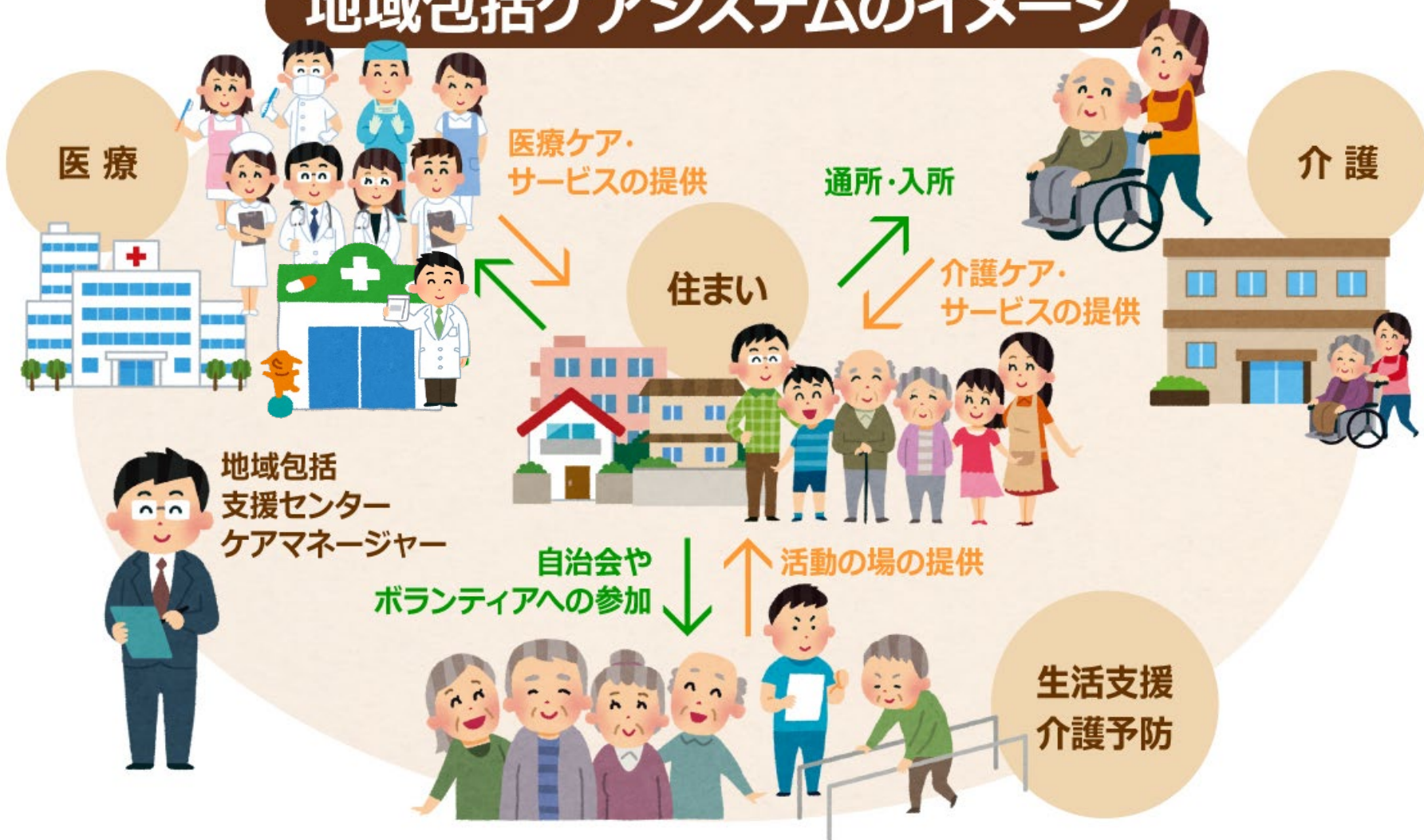
地域包括支援センター、行政、社会福祉協議会、市民団体 等

メディカルソーシャルワーカー（MSW）、民生委員、地域住民、家族 等

退院時や在宅でのカンファレンスにおいても連携

薬局薬剤師の地域連携

地域包括ケアシステムのイメージ



在宅・地域における薬剤師の役割

薬剤師が関与し、患者さんが適切に服薬することにより患者の病状、ADL、そしてQOLを改善または維持する

そのために行うこと

- 【1】服薬状況が悪い場合、その理由を探り、改善のための対策を行う。(服薬支援)
- 【2】薬が患者さんの病状、ADL、そしてQOLに悪い影響を与えていないかアセスメントする。

【1】服薬状況が悪い場合、その理由を探り、改善のための対策を行う。(服薬支援)

飲まない（飲めない）理由	対応策
①薬の整理がつかなくなったため、飲めない。	残薬や併用薬を、重複や相互作用、併用禁忌などに留意しながら整理する
②何の薬か理解していないため、飲まない。	薬効を理解できるまで説明。およびその理解を助けるための服薬支援をする
③薬の副作用が怖いため、飲まない	副作用について、恐怖心を取りつつ対応策を話し合い、納得して服薬できるようにする
④特に体調が悪くないため、飲まない（自己調整）	服用意義を説明し、基本的な病識や約士気を理解してもらう
⑤錠剤、カプセル、または散剤が飲めない	患者ごとの適切な服用形態の選択と医師への提案。嚥下ゼリー、オブラート、簡易懸濁法などの導入提案

①薬の整理がつかなくなったため、 飲めない

対応策

あまった薬(残薬)や併用薬が多数あることにより、整理がつかず、結果的に服薬状況が悪くなる

まずは残薬の確認

○残薬の確認、保管管理状況の確認、投与日の確認のほか、必要に応じて処方医に相談をします。

残薬整理における留意点

○薬の重複、相互作用、併用禁忌、一包化した場合の吸湿性の有無をチェック。

○直射日光、高温、多湿をさけるなど保管場所、保管方法の適切化

○患者の状態と能力に応じた管理方法を模索

残薬の確認と整理の実例(長野県薬剤師会 事例)



患者Aさん(女性)

複数科を受診。多剤服用。訪問介護員は入っているが、薬は自己管理にて整理がつかない状態

A病院(心療内科) 処方薬 7種類

B病院(内科) 処方薬4種類

在宅訪問時に驚くほどの飲み残しが出てくることは多い。
残薬整理は訪問初期段階の最重要課題



【対応】

処方医に疑義照会を行い、A病院、B診療所両方の処方薬を合わせて一包化し整理。これにより服用状況も改善

様々な服薬管理方法の例

患者の残存能力を考慮すること。
過剰な服薬支援は能力を落とす場合もある。



一包化



箱に仕切りを入れて
手製のケース作成
一包化されていても
中身が判る情報

ピルケース



インスリンの
針

投薬カレンダー



様々な服薬管理方法の例

患者の残存能力を考慮すること。
過剰な服薬支援は能力を落とす場合もある。



ビニールパックへのひとまとめ化
(湿気に弱い薬等)



一包化薬を
日めくり
カレンダー
に貼付



通信機能つき
服薬支援ロボットの
活用

残薬管理、多剤管理の為のお薬手帳の利用

通院困難でも、主治医以外に受診するケースはあるので、在宅においても、お薬手帳の活用は重要

【お薬手帳の利点～持ち歩ける記録として】

- 重複投薬、相互作用、併用禁忌を防ぐことができる。
- 時系列で、薬の管理ができる。
- 処方歴が一目瞭然なので、診察の助けになる。
- 多職種間の連携ツールの一つとして活用できる。



②何の薬か理解していない為、飲まない

対応策

薬効を理解できるまで説明、及びその理解を助けるための服薬支援をする。

患者さんが理解して飲むアドヒアランスとがカギである。

コンプライアンスよりもアドヒアランスの向上を意識する。

※アドヒアランス:患者が積極的に治療方針の決定に参加し、その決定に従って治療を受けること

理解を助ける服薬支援の実例(神奈川 K薬局事例)

【73歳 男性 独居】

脳梗塞を発症し、右側片麻痺あり。器質性人格障害、高血圧など既往歴あり。散剤より錠剤の方が服薬しやすいが、大きい錠剤は服薬しにくい。睡眠薬と安定剤は服薬できているが、それ以外の薬は興味がなく、ほとんど服薬できていない

問題点の整理と対策



問題点1)右側片麻痺

⇒片麻痺でも取りやすいように分包

問題点2)大きい錠剤は服薬歯肉

⇒大き目の錠剤はのみやすいように半割

問題点3)興味のある薬しか服薬しない

⇒「興味がない」のではなくて「何の薬かわからない」のではないかと考え、興味を持ってもらえるように薬の服薬方法と薬効が一目でわかるように分類

様々な服薬管理方法の例



結果

【結果】

服用状況が劇的に改善。
新規の薬も日数分全て服用

「何の薬か、いつ飲むのかが一
目で分かるので、これなら薬を
飲むことができる」
(患者コメント)

※介護支援専門員からも感謝の
言葉

③薬の副作用が怖いため、飲まない

対応策

副作用への恐怖心を軽減するために、患者さんと話し合い、納得して服薬できるようにする。

④特に体調が悪くないため、飲まない(自己調整)

対応策

基本的な病識や薬識を再度説明し、服薬意義を理解してもらう

⑤錠剤、カプセル、散剤が飲めない

対応策

服薬に関する因子を評価し、患者さんごとの適切な服薬形態の選択を医師に提案する。嚥下ゼリー、オブラート、簡易懸濁法などの導入も検討課題となる。

理解力
(服薬拒否等)

嚥下能力

身体能力

服薬指導

適切な剤形の
検討

服薬介助検討

即崩壊性薬剤

ゼリー製剤

経皮吸収型薬剤

錠剤
粉碎

とろみ添加
栄養補助食品

簡易
懸濁法

服薬補助ゼリー
水分補給ゼリー

散剤
水剤
外用剤
注射剤

【2】薬が患者さんの病状、ADL、そしてQOLに悪い影響を与えていないかアセスメントする

患者さんの体調や状態(臨床検査値や食事・排泄・睡眠・運動・認知症様症状などの情報)を得る。

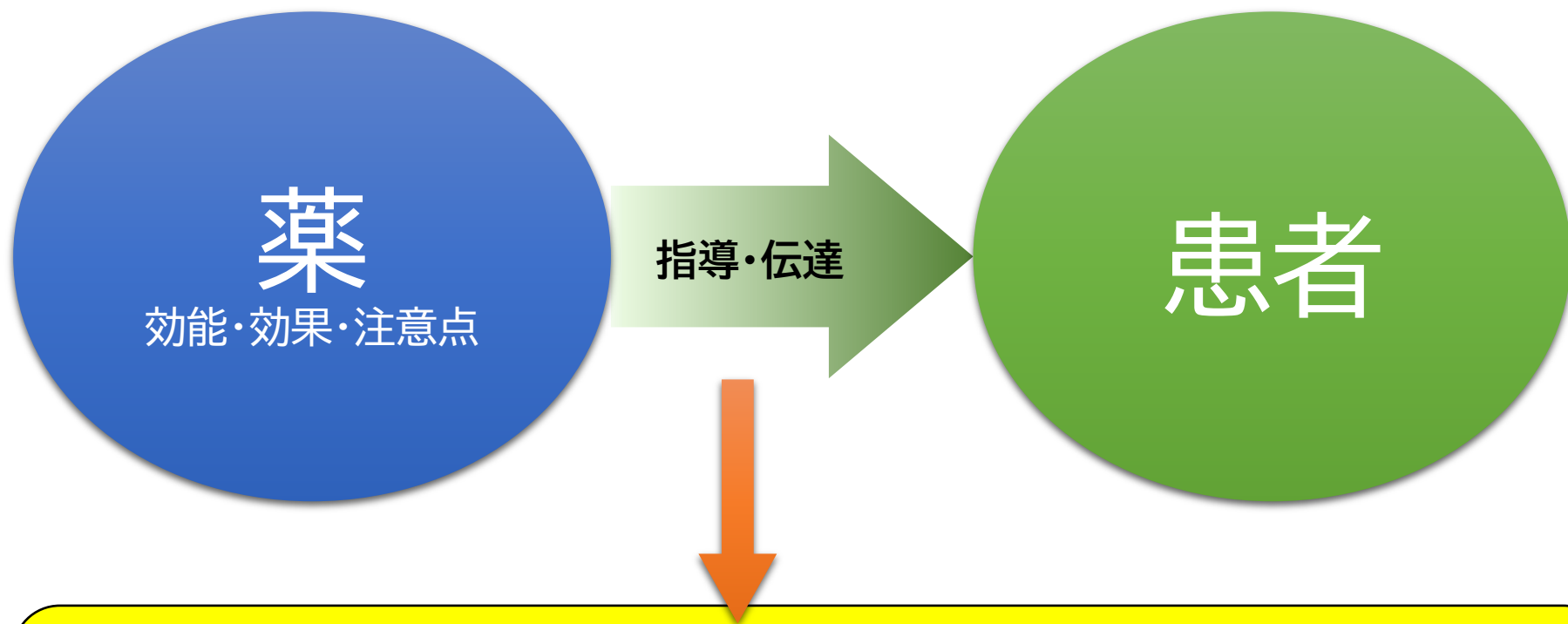


これらの情報を元に、薬がそれらに影響していないかを、薬物動態額や薬理学などの知識をフルに使いアセスメントする。



そのアセスメントを医師、看護師、介護支援専門員らにフィードバックする

薬剤師の一般的な思考回路 「薬」が先に来る思考回路



もちろん重要、しかし・・・

薬の副作用や効能・効果、注意点を患者さんに伝えることが中心となってしまう、**患者さんの状態を見逃す可能性がある。**

在宅や多職種との連携で求められる思考回路 「暮らし」が先に来る思考回路

患者の暮らし

- 患者そのものを見る
- 食事、排泄、運動、認知機能などの状態を聞き取る

その答えと薬を
結び付けてみる

薬

薬効・副作用・相互作用が影響していないか？

日常の暮らしの言葉から、

- ①患者の暮らしの質(QOL)が守られているか
 - ②薬の副作用などで暮らしが悪影響を受けていないかを確認する
- また、薬以外にも様々な課題があると判明したときは、多職種と連携を図り課題に対して取り組んでみる。

まとめ

在宅での療養環境に応じ、個別最適化した調剤を実施しましょう。
また、多職種と連携した服薬管理、服薬支援の実施が求められます。